

「出雲の國・斐伊川サミット設立10周年記念事業スローライフ・フォーラム in 出雲の國」(2017年10月29日(日)開催、於：出雲市「ビックハート出雲」)

～パネルディスカッション～

「たたら文化・ふるさと創生一次の10年を考える」

○コーディネーター

増田寛也(野村総合研究所顧問、スローライフ学会会長)

○地元パネリスト

長岡秀人(出雲市長)、速水雄一(雲南市長)、
勝田康則(奥出雲町長)、山崎英樹(飯南町長)

○スローライフパネリスト

斉藤 睦(地域総合研究所所長)、坪井ゆづる(朝日新聞論説委員)、早野透(桜美林大学名誉教授)、野口智子(ゆとり研究所所長)
神野直彦(日本社会事業大学学長、スローライフ学会学長)

※パネルディスカッションでは各人の前に、飯南町の「しめ縄飾り」が置かれた。





<増田>

それではシンポジウムを始めていきたいと思います。実はスローライフ学会会員の方々は、昨日からこちらの方にお邪魔しております。「わいわい談義」で8月・9月とこちらのほうにアドバイザーの方には来て頂いておりますが、我々は昨日から。私自身はもちろん講演等々で島根県、そして出雲の方にも来る機会がございましたが、昨日、今

日と、特に「たたら文化」という、そういう視点で地域を回らせて頂きました。そして昨日は奥出雲町「斐乃上荘」の日本三大美肌の湯のひとつに浸からせて頂きました。ゆっくりとさせて頂きましたが、ちょうど台風の影響でしょうか、雨も降っておりまして、また逆にそれが神秘的な景観にもつながったように思います。

夜は「夜なべ談義」と称して、市長さん、町長さんにもご参加頂いて、いろいろなお話を聞かせて頂きました。「仁多米」のおにぎりとか、地域のお母さんがお作りになった「煮しめ」をいただいたり、本当にこちらの「たたら文化」を体験させて頂くという経験をいたしました。今日は会場に来る前に出雲大社に寄りましたが、ちょうど雨もその時だけ止んでおりまして、遷宮の、改めて屋根の整備された姿を見ることが出来ました。大変いい機会をいただいたと思っております。

観光の4要素というのがあります。ひとつは四季の変化、2つ目は豊かな自然、3つ目が文化伝統、それから4番目が食べるもの、あるいはお酒、そうしたものです。四季の変化、自然、伝統文化、そして最後にやはり食べるものと。これを本に書いていましたのは、デービッド・アトキンソンというイギリス人です。

『新・観光立国論』とか『国宝消滅』とか、外国人の視点で、しかし日本語ペラペラの大変日本の観光に精通している人が書いた本の中に、そういうことが書かれていました。実は彼だけじゃなくて、観光に携わっている人達の中ではこういう4つの要素が大事だといわれています。ここ出雲は大勢のお客様がきて、まさに観光の一大拠点ということではあります。単に観光というよりは、外から見てその地域の住みやすさとか、心地良さがそこに表れているので、そういう4つの要素ということになっているのではないかと思います。

ただ逆にいうと、日本のほとんどの地域が今の4つの要素を満たしています。それぞれにお国自慢とかがあります。でもここの地域の1000年を超える文化伝統というのは、やはり他に比べて圧倒的だなと思います。またそれが、神々しさ

がありながら、一方で生活の奥深くまで根付いた形で出てきていると。先ほど神野先生のお話の中では、今、近代工業化から更には脱工業化、情報化とかいろいろない方がなされますけれど、そのなかで失われたものをどう残していくか。そして、これからに合わせて再整備、再創生、あるいは再創造していくかが大切だとのことでした。これからの我々が、地域の住民全体として、住みやすさ、心地良さを求めてということです。

私はスローライフの一番の究極、原点は、「循環」という事と、「持続可能性」という事ではないかと考えます。一時、数年だけ持つのではなくて、ずっとそれを持たせる仕組みが必要ではないか、しかもそれを地域の資源を見て、それを十分に生かし、循環させることにあるのではないかと、こんな風に思っております。

時間も限られておりますし、後ではいう機会もないと思って先に少しお話ししました。残りの方は今日ご登壇頂いている皆さまに存分にお話をして頂きたいと思います。はじめに「わいわい談義」にアドバイザーとして参加された4人の方、齊藤さん、早野さん、坪井さん、野口さんにこちらに来た印象などを。



<齊藤>

ちょうど30年くらい前に、こちらへはよく通いました。当時もう既に島根県は過疎ということで、凄く危機感を持っていました。県庁に若くて気概のある職員の皆さんがいらっしやいまして、これからの30年間、出雲地域というか島根県全体をどういう風に持続可能性のあるところとして生き延びていくかという事に関して、私どもは計画事務所ですから、その相談を出来ませんかということで。それぞれの自治体を作る総合計画に住民の気持ちや心を反映させて作るにはどうしたらいいか、そのために月に1~2回ぐらいずつ通いました。全ての町村を訪ね、夜はワイワイいろいろな議論をしながら県の方たちと1冊の計画づくりのマニュアルを作りました。

その時のキーワードのひとつは「内発的な地域づくり」。今、日本語は例えばコンカツとか、パソコンとか、とにかく4文字の片仮名にすると流行るんですが、その頃はあまり気が付かなくて、ゴツゴツとした言葉でやったんですけど。外発的というのは「どうも国はこういうことに補助金を出してくれるから」とかです。ね、「よその町でこういうような成功をしたことがあるようだから、それを取り入れればなんとかなるんじゃないか」とかいうやり方。そういうまちづくりは辞めましょうよと。もっと自分たちがこういうまちがほしいという、真実そうい

その時のキーワードのひとつは「内発的な地域づくり」。今、日本語は例えばコンカツとか、パソコンとか、とにかく4文字の片仮名にすると流行るんですが、その頃はあまり気が付かなくて、ゴツゴツとした言葉でやったんですけど。外発的というのは「どうも国はこういうことに補助金を出してくれるから」とかです。ね、「よその町でこういうような成功をしたことがあるようだから、それを取り入れればなんとかなるんじゃないか」とかいうやり方。そういうまちづくりは辞めましょうよと。もっと自分たちがこういうまちがほしいという、真実そうい

う風に思える、つまり内発、自分の内側から起こってくる内発的なまちづくりというものを反映できる、そういう計画の作り方をしたい、という事がひとつのキーワード。もうひとつは「協働」、協力の協に共に働くという協働でした。

昨夜の「夜なべ談義」で当時の計画づくりに入った職員の方と、お会いしました。頭の脳細胞が当時に戻ってしまいまして。やっぱり当時、心を分かちあって、分かちあいということを経験した人達と会うと当時に戻るんだなと、そういうことを感じました。



<早野>

長く朝日新聞の政治記者をやってきました。ほとんど人生のというか、活動期の全部を新聞記者として過ごしてきた次第です。桜美林大学の名誉教授というのは定年になったという意味ですが、最後の6年間、学生諸君とつき合っって一緒に飲みに行ったりして、とても素晴らしい6年間でありました。

政治記者だった時代、私は田中角栄さんの担当でした。そして『田中角栄』という本も実は書いています。角栄さんはやはりこの人は詰まるところ、「経済成長だ、みんな景気よくなろう、生活良くしよう、もっと稼ごうや」というようなことですね。それもそうだなと思って、私も長く取材し、本も書いた次第であります。この頃それが間違いじゃないかなとつくづく思うようになっていきます。あくせくあくせく日本が前に進んできて、今どうなのだろうか？人々それぞれの境遇で違うと思いますけれども、必ずしも幸せに思っている人ばかりじゃない。かくいう私が、歳をとってくたびれたなあなんて思って、これからどんな風に生きていったらいいのかそれもよく分からない、という感じでおりますのですから。

先ほどの神野さんの話に、とても感銘を受けました。成長ということよりもひとつ時代前の、人間が互いにいたわりあい、他者へのやさしさのある時代を振り返る、ということですね。そういうことを、これからの日本あるいは世界も含めてどうやって創っていったらいいのか。私はそれが彼の今日の講演のキーワードだなと受け止めた次第です。出雲というのはその言葉の響きの中にやさしさが入っていますよね。観光資源がどうのこうのなんて、そんなことよりもっと根本的に出雲の國というものが、日本での存在、神野さんのいう人々のやさしさというのを象徴しているように思えます。

<坪井>

一言ご挨拶とのことなので、一言で。出雲の國は蕎麦と酒が旨いというのが印

象です。あともうひとついうと、このあいだ8月にお邪魔したときにしめ縄づくりのところで、ドバイから注文が来たしめ縄があって、それを「いくらで売ったんですか？」と聞いたら「100万以下です」ということでした。写真を撮って帰り、私の周りに見せたら「500万は取っていいだろう、ドバイのお金持ちだから1000万はとれたぞ」という話がありました。

<野口>

フォーラムの打合せも含めまして、5回ぐらいこちらの方におじゃましております。感想はこの『とんばらぼん』に尽きるんです。この本は飯南町の頼原の素顔を紹介しています。この本が私は大好きで、こういう世界が出雲の國にあったんだということに驚きました。ここに“じわじわ好きになる”という言葉があります。まさしく私は出雲の國というのは、人をじわじわ好きにさせてくれるところだなと思っています。



<増田>

『とんばらぼん』には、私もすごく感銘を受けました。皆さんはご存知だろうと思いますが、もしご存知なければ、ぜひ手に取って読んで、あちこちに宣伝していただければと思います。

それでは神野先生はまた一番最後に話して頂くとして、こちらに両市長さん、両町長さんにおいでにいただいています。冒頭の神野先生の講演「結びあう、分かちあう」をお聞きになってのご感想をはじめにお願いします。出雲市長さんの方から順次お願いします。

<出雲市長>

先ほどの基調講演、非常に感動いたしました。やはり我々が失っているもの、見落としているもの、そういったものをもう一度考える時代です。出雲は“分かちあい、結びあい”が残っている部分が多い地域ではありますけれど、大事なものがこれから徐々に本当になくなってしまいうんだなど。今、何かしなければせっかく守ってきたものが失われる、そのことをまた改めて強く感じたところでございます。出雲は住んでいる皆さんが自らの地域の素晴らしさ、価値に気づいていないという事がまたいいことだなどは思いますけれど。その辺をうまく次の世代にどう伝えていくか、これが大きな課題だろうと思います。

<雲南市長>

神野先生のお話に、人間の生きる道の方向性が見失われている、それはコミュ

ニティの崩壊があるからではないか、これを取り戻す必要がある、工業化以前の社会を取り戻す必要があるとありました。その具体的な姿が「たたら文化」の見直し、「ふるさと創生」の必要ということでした。たたらは大きな「ふいご」のことです。砂鉄を取るために山を削る、削った後、そこに田んぼを造って稲を作り、美味しい水でお酒も造って、そして地域の魅力を紡いでいく。いわゆる循環型経済の源が「たたら文化」にある。「たたら文化」の見直しとは、そういうことをいっているのだと思います。

島根県の面積8割が、そして雲南市の8割が山林です。国の7～8割が地方といわれるのであれば、地方全体を循環型のようなやりかたで再生する、山林の再生、そして農業の見直し、それが地方創生につながるのだと思います。そのためにはコミュニティを再生する仕組みが必要です、これが今日の議論の大きな核心になるのではと思いつながりながら聞かせて頂きました。

<奥出雲町長>

昨日の「夜なべ談義」を、我が町の「斐乃上荘」で開催して頂きました、誠にありがとうございました。本当に狭い部屋の中に60名余の皆さん方にご参加頂きありがとうございました。また、冒頭で基調講演をして頂いた神野先生には東京で仁多米を食べていらっしゃるというお話で、厚く御礼を申し上げたいと思います。「結びあう、分かちあう」というテーマで基調講演をいただきましたが、地域の住民が手と手を繋ぎあって生きていくというやさしさの面、悲しみを分かちあうという心の大切さ、そしてコミュニティそのものがリーダーシップを育てるものだというお話を聞いて、非常に参考になりました。また近代以前にあったものをもう一度発展させようとする、再生と申しますか、循環型の必要性を改めて認識しました。

<飯南町長>

今日のお話は特に中山間地域での存在意義、そこにつながる話だなあと思つて聞かせて頂きました。この2市2町の斐伊川サミットが次の時代への道筋をしっかりとリードしなさい、というエールも送って頂きました。私は小さい時から「水の神様が住んでおられるので、水路に汚いものを投げてはいけないよ」と年寄りから聞いて教わりました。飯南町は神戸川の源流ですから、源流の責任と誇りとして川を汚してはならない、上流の綺麗な水を出雲市民の皆さん方へ流す責任があるし、源流の誇りがあると常々いっています。現代風にいうとこれは森林整備ということ、これを増田先生、神野先生にお願いして、例の環境税、これを是非とも市町村が本当に使いやすい自然環境森林整備ができるような仕組みにして頂きたい。この場を借りてすいません。

田舎のコミュニティは、昔から今もそれは連綿とした関係を築いてきていますが、最近新しい風が吹いてきました。Uターン、Iターンという方が町へ入っ

ていただいて、非常に今、いい状態が出来ていると思っています。例えばこの「しめ縄飾り」、先ほど川島先生からご紹介頂きましたが、神代の時代からある物です。それが今こうして花を飾って、まさに新しい時代にふさわしいしめ縄にしています。このような新しい風が吹くコミュニティをどうやっていくか、私はこれもいわゆる地域包括ケアの話だと思っています。まずは地域包括ケアを都市へ広げて行って、日本をうまい具合な仕組みにしていこうと。そういうことからしても、地方はこうした伝統文化、コミュニティをしっかりとしていかななくてはと思います。

<増田>

市長・町長さんからコミュニティという言葉が再三出て参りました。神野先生のお話の中にもございましたが、コミュニティ、集落共同体とかいろんな呼び方がされますけれども、そうしたものが今どんどん崩れてきているという危機感からと思います。

斉藤さんの発言に、内発型、内発的地域作り、そして協働という事にそういう視点を置いて30年前から島根県の町村に入ってやってこられたということでした。そういうことがこの島根県の地域でその後どういうふうに関わってきたのか。あるいは「たたら文化」ということがあったことによって、より他の県などに比べて前面に出して進めてきやすかったのか。コミュニティをもう一度再構築していくようなことについてもどういう風に見てこられたのか、斉藤さんからお話しただければと思います。

<斉藤>

先ほどの話に戻ります。当時の計画づくりの話をしてみると、国が計画書とはこういうものだというモデルを作って、県がその中間に立って似たようなパターンのものを市町村が作るというのが普通だったんですね。そういうお仕着せの計画を作っても、自分たちでそれを旗印に掲げてまちづくりをやるというのはならない。だから地域の皆さんの所に入り込んで、皆さんの心の内に眠っている事を少し表に引きずり出して、それをスローガンに掲げた計画づくりをやった方がいいのではないかと、その手引き書、計画づくりのマニュアルというものを作ったんです。いくつかの町自体に私どもも、その計画書を作るお手伝いに入りました。

30年前、合併をする前ですから、大東町とか昔の名前でしか頭に出てこないのですが。お手伝いをした30年前に議論をしていたのは、今回のフォーラムで昨日視察した、また報告にもあった「地域自治組織」まさにその話だったのです。日本に3300ぐらい自治体があったのが、「このままではとても持続していけないだろう、合併みたいなものがあるだろう、そうすると例えば吸収合併になったりして自分たちの地域がアイデンティティ、よりどころみたいなものがなくな

ってしまうというのはちょっと残念じゃないか」と意見が出ました。自分たちはこういうふうな地域でいたいということを、その地域の小中学校単位で方向性がちゃんと議論し示せる、要求できるような、そういう地域を作りましょうよということがスローガンでした。海潮地区など、加本さんがさっき報告されたところはなど自治会がしっかりしていると聞いたものですから、そういうところをモデルにして、ある種の地域経営、地域がひとつの会社のようなものになって、住民の生業も含めて担って行けるよという議論をしました。

やっぱりそういうのが DNA というか人々の中に言わず語らずに蓄積するものじゃないかなと、今回あらためて30年経って来てそう思いました。またその源流には「たたら文化」もあるのではないかと。国が産業振興せよとか、砂鉄でがんばれとかそういう上からの話ではなくて、地域にこういう資源がある、その資源を鉄にすれば地域の豊かさを獲得できるんじゃないかという、自前でやってきたのだと思います。

もうひとつのキーワードは「協働」です。役所は役所のことだけ、町内会は町内会だけ、工場は工場で経営頑張ればいいとか、そういう縦割りのところでがんばっていてもそれは限界がある。なので、できるだけ共に一緒に何か出来る形を地域の中でひとつひとつ作っていきこうと、それが「たたら文化」の中で山を削ったところが棚田になっていくとか、いろいろな役割が繋がって一緒にやってくとか、もともと続いていた。4~500年あるいは1000年も続くような仕組みが、この出雲の地域にあったのではないかなと、まあだいたい予想が付くんですね。神野先生がおっしゃったように、やっぱり地球はなかなか大変なことにいろんな意味でなるのじゃないかなと思います。

それと日本は増田さんがおっしゃったように人口減少になっている。30年前に島根県は既に人口減少に入っていた、そこで生き延びていくためにはどうしたらいいのかということをお先に考えていた。自分たちで行く末を自己決定していけると、そういう力のある地域として育てたのであれば、おそらくこの島根県で考えたことが日本の人口減少の中で、日本全体をリードしていく先駆的にモデルになるんじゃないでしょうか。中国は



少子化を辞めましょうということで子どもを増やすようにした、それでも圧倒的に少子化になっている。インドネシアもインドもどんどん少子化になる。そうすると日本に学べということになるし、日本に学べということは島根県に学べということになるのではないかと思います。

<増田>

早野さんは日本の政治家に肉薄していろいろなことを書かれているわけですが、いみじくも田中角栄さんなどが代表する経済成長というのは、やっぱり間違いでむしろ時代が大きく変わっているということをおっしゃった。それと同時に神野先生の講演の中で他者へのやさしさということ、そこをとりあげて強調された。9月に「わいわい談義」でもこちらに来ておられて、今回も来て、そのやさしさと出雲とを結びつけて先ほどおっしゃった。そのあたりを少し解説して頂ければと思います。

<早野>

なんか壇上から逃げたくなるような難しい質問ですね。でも本当に大切な、問いかけであろうかと思えます。田中角栄さんとはとにかく豊かになろうじゃないかということでしゃにむに政治を引っ張っていった、その次に出てきたのはご当地の竹下 登さんですね。田中角栄さんの子分と言えれば子分だったのですが、でも角栄さんとはちょっと違う。「ふるさと創生」という言葉は竹下 登さんが考えてアピールしたんですよ。

政治部記者は竹下 登さんの家に夜回りと呼んでよくおしかけたんですけど、その時に「角栄さんのいう成長も無論大事だが、やっぱりふるさとが大事だよな」とぼつりぼつり語り出すんですよ。それで、「え、ふるさとですか？」僕は東京育ちなものですからそう反応する。すると「そうだよ、お前な、俺のところの田舎に来てみろ、すごくいいぞ」とこういうんですね。それが壊れちゃ困るというようなことをおっしゃって、そのうち「ふるさと創生」ということを政治の場でもいい出されたんです。つまり、ただの成長の一辺倒ではなくて、人々の心と心が繋がっているふるさと、そういうこともやっぱり大事にしていかなくちやいけないんだぞ、ということだったんですね。

今日の神野さんのお話は更にそれをすすめて、前近代、近代以前のということになる。おそらくそのことを私なりにくみ取ってみると、田中角栄さんが成長、成長と、竹下さんはもうちょっと心の豊かさを保とうよ、と。神野さんになってくると今度は成長そのものを、もうマイナス成長でも良いんじゃないかというふうにおっしゃったのかどうかわかりませんが、私はそんな風を感じ取ったんです。もうちょっと足下を見つめ直してみようよと。

昔、私たち新聞記者はわら半紙に鉛筆で原稿を書いていた。そしてその記事を活字にしてもらっていた、活字も一文字ずつ拾って紙面の形に作ってそれで印

刷していたわけですね。今は全部のプロセスがコンピューター、パソコンに。そういう時代の進化というのは、それはそれで大事だし必然的だし、それを後もどりさせる、前近代にもどすというのはとても無理です。だから自分たちの生活をもうちょっと見直して、効率よりも人々へのやさしさを大切にということでしょう、やさしさということは非効率ということですよ。人間の生き方をどういう風に、50年、100年先、1000年先いったいどういう人間の社会になっているんだろう、というところまで考えながら模索していくことかなと思います。

<増田>

今回、掛合町の道の駅にも寄りましたし、田中角栄さんに続く、竹下元首相が始めた「ふるさと創生」が今の原点だと思いますので、そういった関連もあって早野さんにお話しして頂きました。私もそうでしたけれども、高度成長期、脇目もふらずとにかく必死になって先進国に追いつきたいという、脇をみる余裕もなくまっしぐらに走ってきたのじゃないかと思います。そういうのが、国全体としてすごく讃えられたということもあります。

それに対して先ほどの神野さんのお話はそうではなくて、なんかこう、他者へのまなざしみたいなものです。脇目も振らずじゃなくて、やっぱり周囲を見る余裕とかそういうことの中で初めて出てくることじゃないかと思います。逆にいうと、今、そういうことをできる、あるいはしていかなければいけない段階にきているのではないかということです。

昔、私は岩手県知事の時に、「頑張らない宣言」というのをやって、えらい怒られたんです。その当時、要は東京に追いつけということで頑張ろう、頑張ろうだけだった。そうじゃなくて、頑張らないで自分たちの持っているものを自分たちの物差しで、それをもっと強くしていこうよ、という呼びかけだったんです。それを「頑張らない」ということで表現したんです。なにかそういうことに通底するようなお話しだったのでないかと思って聞きました。

先ほど坪井さんは蕎麦と酒のお話だけでしたが。



<坪井>

脇目も振らずに来た、その結果この国はどうなっているかという、非常に自己責任を問う国になっているんですね。働かざる者食うべからずというのは普通に語られている、要するに他者に対してやさしさが無い。出来の悪いやつは働けない、しょうがないと。貧乏だからしょうがないだろうといわんばかりの社会にな

っている。これが、そろそろもう持たない。こういう出雲の地とか、人口が減って高齢化していくところで現実のものとして現れてきてしまっていると思うんです。つまり自己責任を厳しく問い続けてきた日本が、もうそうじゃない社会にならなくては持たないのだという、時代が変わり目に明らかに来ているんだと私は思っています

なので、実はこの間の、先週の日曜の衆議院選挙を皆さんどうご覧になったか。結果はああいう結果なのですけれど。私が、え？と思ったのは、自民党が増税を訴えて初めて勝った選挙なんですよ。つまり増税をしなきゃ社会が持たないということを、皆が理解し始めている。安倍さんが消費税増税を最初に見送ったときに、増税をしなきゃならないと皆さんはそう思っていなかった。しかし今、増税やむなしだ、というぐらい、お金を回していかなければならない。お金の回し方を変えなきゃいけない、という時代になってきているのだと思います。

そういうのを出雲の國は地域自主組織という形で具体的に組織化して、実際にもう始めていると。ある意味でトッランナーがここにある、と私は思っています。自助、共助、公助みたいな、その共に助ける、公で助けるというものを、いかに形として実践していくかということがきっちと出来つつある、というかできているというか。全部が全部成功しているとは思いませんが、そういうところをきちっと見ている。

それは先ほど齊藤さんが仰ったように、30年前から過疎に悩んでいたから何とかしなきゃ、自分たちで知恵を出さなきゃいけない。結局自分たちで知恵を出してやって行くしかない。行政は多少の補助金はくれるかもしれないけれども、知恵をだしてもらえないかもしれない、結局は自分たちがやるしかない。これは自己責任をいってるわけじゃ無くてですね、自分たちでどう助けあうかを考えるという、こういう社会になってきている。だから神野先生の話の聞きながら、僕はそういう時代の変化を仰っているんだろうなと思って聞いてました。

<増田>

確かになにかあるとすぐ自己責任ということで、特にそれが権力側から発せら



れることが多いので、そういう中でこの共助とかそういう繋がりというものが全く違う響きで耳に入ってくるなあと改めて思いました。

<野口>

私は何度か通っているうちにももちろん出雲地域を好きになっているのですが、あなたたちどうしてるのよ、と少し叱りたくなるんです。「たたら文化」と言葉に出すのは非常に簡単ですし、今日もこうして「たたら文化」を語っているのですが、「たたら文化」とは誰が作ったんですか？昔の人が「鉄穴流し」をして「残丘」ができて、鉄ができて、とかそういうストーリーがあるのですが、いまの私たちがそれを知ってそこから何を得るのが大事と思うわけです。それぞれ皆の立場で「たたら文化」から吸収したり考えたことがあるはずですよ。細かい砂鉄の粒が、木の命をもらった炭の、炭のとんでもない熱で溶けて、ついには強靱な鉄になっていくわけですね。私はそれに心打たれるわけですよ。小さなものが自然の力を借りて、命をもらって、強いものになっていくことを「たたら文化」から学びたい。

そういう学ぶものが近くにあるのに、もっとしっかりしようじゃないかと思うわけです。「たたら文化」という歴史があります、と知っているだけじゃなくて、私たちがそこから何を心得て何をやるかなんです。私は、小さなものが集まって強くなっていくことを学んだ。となると、例えばしめ縄だって、細い藁が何本も寄り集まって強い立派な素敵なしめ縄になっていく。そういうことに学んでいかなければならない。地域おこしとか「ふるさと創生」においても、小さなアイデアとか、最初は馬鹿馬鹿しいといわれる思いつきとか、ささやかな試み、そういうものが寄り集まってとつても強い力になるはずなんです。

冒頭にご紹介があったこのステージのお花も、「斐乃上荘にあるお花をここにもってきたいです」と当初希望しても、「とんでもない、ステージのお花なんて」とおっしゃっていた。しかしそのご本人が、最後はここまで来て、素晴らしいこのお花を活けてくださった、これは自信になる、強さになるわけですね。最初はちっちゃなことなんです。例えばなんで仁多米を「たたら米」といわないのだろう？または、嘘でもいいから仁多米には鉄分豊富で食べているうちに鉄人になっていく、鉄分がいまみんな不足してるでしょ、だからこの土地の野菜を食べたり米を食べていけばすごい鉄人少女、鉄骨少女になるんだ、とかですね、そういう新しい物語を作ったっていいわけです。これも馬鹿馬鹿しい話ですよ。でもそういう小さな積み重ねが、凄いことになってくのだと思います。

出雲大社って誰が造ったんですか、そもそもを私たちが今の時代に造ったわけじゃない。あのスーパー観光施設だけに頼りすぎているように思います。お客さんをお呼んでくれる、人が来てくれるのだったら、なんでその人たちへ「煮しめの作り方教えるよ、雲南市まで来てね」とか、「お肌磨きに奥出雲まで来てね」

とか、「自転車に乗ってスロートーリズムやりましょう、飯南に来てね」とか、そういう形でもっともっとぐいぐいと、その女子たちを引っ張らないのか。これだって小さなアイデアの積み重ねで出来るはずなんです。今は、すごい観光施設よりも、その土地の人がキラキラ自慢げに生きてることの方が一番の観光資源です。そう思うと年寄りばかりでダメだダメだといっているのではなくて、「地域自主組織って知ってる？」って、出雲大社に縁結びに来たギャルたちに教えてあげるぐらいの土地になりたいと思うわけです。

<増田>

叱咤激励ですね。なんか歯がゆさが伝わってくるというか、これだけのものがあるのにという感じなのです。昨日、刀鍛冶さんのDVDも見ました。鍛造の様子、何度も折り曲げて叩き鍛える様子があって、そのぐらいやらないと刀剣にはならないということでした。野口さんにこちらの若い人たちを鍛えてもらうとちょうどいいのかなと思いました。

自然循環の仕組みもあるし、仁多米のようなお米も支持されていたり、出雲大社のほうに大勢のお客さんが来ておられるということもある訳ですけども、先ほど市長さん町長さんのお話の中では、必ずしも住民の皆さん方が意識し、いろんなことを自覚しているわけではないようです。むしろそういったことを地域で起こしていくために、「地域自主組織」なりなんなりを色々と蘇生をして、それで今、現実の行政を進めて行かれているというお話しを、行政側の取組のことをお聞きしていきたいと思います。

この中でも自治体の大きさとしてもだいぶ違いがあって、飯南町が一番小さな自治体。そして出雲市は17万人ぐらいの大きな都市で、しかも製造業もそのなかでも根付いていて、島根県を引っ張っていくだけの力もある。まあ自治体ごとにもそれぞれ重点というか力点の置き方もだいぶ違っているのではと思います。住民の数が多ければ多いほど逆にいうと、その市民の中でも考え方の違いもありますし、「地域自主組織」を全般的に広げていくというわけにもなかなかいかない。先ほど出雲市長さんのお話の中で、市民が気づいていないという人も大勢いらっしゃる、けども気づいてないというのがいいところなのかもしれない、とこういうお話しがあったので、まず出雲市長さんから、行政の中でこれまでの資産やそういうものをどういう風に活かしてきたのか、どう受け継いでいくのか、あるいはこれをどう利活用していくかそのあたりお話しを頂ければ。

<出雲市長>

出雲市はご覧のように地域が広いんです。624平方km、東京都23区と同じ面積、そこに17万人。まあそういう意味では面積的にゆとりがあり、だから心にもゆとりがある。

出雲大社にお蕎麦屋さんが20数件あります、だいたい15時頃になると閉ま

るんですね。それで準備中という札がありまして、遅くに来られたお客様が「せっかく来たから出雲蕎麦を食べよう」と並んでいらっしやると、準備中というのは翌日のための準備でして……。私が店主の皆さんに「もちよっと長くやらんか、夕方もう一回どうかね」といったら、店主方は「いや、手打ちで本気でやっていいものを食べてもらうには、これ以上のことをする必要はない。そんなに儲けようと思わん」と。ここが出雲の心といいますか、「国譲り」したぐらいの土地ですから、その伝統があるんですね。勝つとか負けるとかその競い合うとかそういうものとは違う世界、というのが出雲だと思っています。

そういう中で平成の大遷宮の効果がいろんな形でありました。とくに縁結びの神様ということになると、出雲大社に訪れる観光客の7割・8割は女性です。女性の皆さんの心を掴むというのは出雲の観光というにとっては一番大事なことになっています。ですが、残念ながら年間60万人訪れる出雲大社の観光客の中で宿泊するお客様は60万人しかいない。これをなんとか長期滞在といいますか、出雲大社だけではなくて、周辺の素晴らしいものを見てもらいたいと思っています。



出雲は「日が沈む聖地出雲」ということで日本遺産になりました、夕日を見たら泊まっていたらいいと思うわけです。経済波及効果でいいますと通過観光、日帰り観光客の消費額というのは1人あたり4千数百円、宿泊するとそれがとたんに25000円ぐらいに上がる。その1人あたり2万円の差というのは、大きいです。ホテルも誘致して既にオープンしていますので、60万人の宿泊を2年後ぐらいには80万人、100万人の皆さんに泊まって頂くようにしたい。泊まって足を伸ばして、出雲のもっといいところに直接触れてもらいたい。私は、いろんな施設云々ではなくて、人々の暮らしそのものが観光資源だと思っています。その日々の営み、それを含めて、しっかりとみなさんに触れ合ってもらえるような、そういうような観光にしたいものです。

観光は産業的にいいますと裾野が非常に広い産業でして、単に一部の業者が儲かるというような話ではなく、すべての産業に波及効果が及ぶ、そのことによってまた多くの雇用が産まれる、その循環をしっかりとしていく必要があると思っています。「まち・ひと・しごと創生」といいますが、私にいわせれば順番が全く逆で、仕事があれば人が住むし、人が住んでこそまちが成り立つ、逆なんですね。私もまずは雇用の場を増やす、それを徹底してやってきております。

それも同じような職種だけでなく多種多様な、いろいろなものを学んだ若い人達がそこで能力を発揮できるような、そういう雇用の場を提供する、これが唯一人口減少に歯止めをかける方法であると思っています。

<増田>

地元の方は「たたら文化」とかそこにある循環型の考え方について、あまりご理解していないというか、当たり前だという風に思ってるのでしょうか。

<出雲市長>

上流部の皆さん、直接「たたら文化」を身近に思っている皆さんと少し違います。川流しによって出雲平野が出来て、その恩恵を受けたはずの我々ですけど、なかなか市民的にそれを全部たたら云々という話にはなりにくい。ただ、出雲市内にもたたら遺産が沢山あります。雲南市や奥出雲のそれに劣らないような遺跡もあります。出雲市は多様な顔を持つまちにしようとしていまして、単に観光都市ではなく、もの作りのまち、農業が盛んなまち、いろいろなものを角度を変えて見るといろいろな見方が出来る、そんなまちにしたいというのが目標ですね。

<増田>

観光ひとつとっても、「こと」、体験ですね。以前に比べて「見る」というより「体験する」、そういうところに皆さんの満足度が集まってきている、非常に多様化していますので、それは観光だけじゃなくて行政の方でも様々な面で多様なまちづくりをして、いろいろな人達を海外からも含めて受け入れるということをしてもらえるんだろうなと思いました。

さて昨日、我々は雲南市の波多地区に行きました、海潮地区の方は行けませんでした、雲南市では「地域自主組織」というものを作って、それと行政がつかず離れずいろいろな形で伴走型で寄り添ってきたんじゃないかなと思います。この「地域自主組織」を中心に行政を展開してる、どういうふうに行政の中で位置づけておられるのか、あるいはこれをどういう風にしていこうとおられるのか、このあたりについて雲南市長にお話し頂ければ。

<雲南市長>

平成16年に6つの町が一緒になって誕生した雲南市です。13年を迎えます。合併する時点で、すでに空き家が多く、高齢者、独居老人が多いということで、家庭力、世帯力が落ちていた。従って自治会力も落ちていた。そういう自治会の集まりの、地域の地域力も落ちていた。このまま何にもしないと、どんどんそうした負のスパイラルでますます沈降してしまう。何とかこれにストップをかけられないかということで、合併協議会等で検討した結果、公民館を拠点としたまちづくり組織を作ろうということが提案され、それでやって行こうということになりました。

公民館というのは終戦直後全国に旧小学校区単位で設置されておりまして、それが今に繋がっています。昭和の合併があって平成の合併があって今に至った、にもかかわらず公民館を中心とした生涯学習は続いている。それに加えて福祉の拠点にも、地域づくりの拠点にもなっている。ということは、結びあう、分かちあう社会は、公民館を拠点としたその地域に残っている、それが存続している。



だったら公民館を見直して、生涯学習だけの教育委員会部局にまかせておくのではなくて、生活 360 度に係わる仕事をしている首長部局がそれを所管して、まちづくりの拠点としてやっていこうということになったのです。雲南市では 30 の「地域自主組織」が構成されて、名前も公民館から「交流センター」に変えて、それを核としたまちづくりをすすめて今に至っているわけです。

公民館を、あるいは元公民館を中心としたまちづくりをやっている自治体が沢山あるということで、全国に声かけさせて頂いて、現在「小規模多機能自治体ネットワーク協議会」を組織化したところでございます。237 自治体が参加頂いております。これに NPO とか自治体以外を加えると 275 団体です。当初は小規模自治体だけだったのですが、政令指定都市も入ってきておられますし、だんだんこれは全国に広がって行って、今に 300、あるいは 350、400 になっていくと思っております。

このコミュニティ組織、雲南市でいえば「地域自主組織」の頑張りが自治体全体の強さ、あるいは持続可能なまちづくりにつながっていく。そのためにはコミュニティそのものも、自らが稼がなければいけない。今日も「山陰中央新報」に「稼ぐ」という題名の論説がありました。斉藤さんも仰ったように、内発型の住民組織が自分たちの地域作りは自分たちの稼いだお金でやるんだ、という意気込みがどんどん広がっていくと地域力の強化、自治体の強化、持続可能なまちづくりにつながっていくと思えます。

「たたら文化」から、物づくりの大切さを学ぶ必要があると思えます。雲南市の山林がかなり荒れております、竹が生い茂っている。竹林は底が浅くて、突発的な豪雨には地滑りの原因となる、だったらこれを全部切ってしまうのではなく、利用しようと。炭を作って蓄電池を作り、太陽光発電で蓄電し街灯をつける。そういう商品を作り出そうと、今、開発しつつあります。そんな産業が内発型の取組として誕生すれば素晴らしい。そうすると稼ぐ自治組織に法人格は必要だ

なということで、今そのことも国に働きかけています。「小規模多機能自治ネットワーク会議」から出した法人格を、ということについて、国が答えを出して、なるべく地域のためになる新しい税制が創設されることになるでしょう。

<増田>

なるほど、さきほど「わいわい談義」のご報告でお話頂いた海潮地区の加本さんもおっしゃっていた、自主組織の法人化という意味はそこにあるわけですね。

奥出雲町長さん、奥出雲でもこういう「地域自主組織」のような試みが大変有効だという風に思っていますでしょうか。



<奥出雲町長>

雲南市の加本様に本庁の方におしをいただきまして、各地域の座談会等でお話しをして頂いたり、島根大学の先生方とも話しあっています。まだ私どもは、自主組織までは正式に立ち上げておりません、やはり行政が少しでも支援するような体制を構築していかなければならないと思っております。

奥出雲町には9地区ございますので、そこへ向けてある程度アナウンスをいたしまして、「きらり輝く地域づくり事業」という形で募集して、何か事業をされるような場合には1地区に対して年間50万円ずつの交付金を支給している状況です。できるだけ雲南市さんを参考にして、地域の活性化につなげて小さな拠点作りを目指して参りたいと、昨年度頃から2～3地区そのような事で動き始めています。

人口1万3000人の小さな町で交通難民と申しますか、お年寄りも結構おいでで、病院、そして買い物に出かけるのに非常に不便です。何かしら空き家を活用して地域の皆さん方が商店を開くとか。そしてまた、バスの営業もままなりませんので、場合によっては行政の方で小さな10人乗り程度のバスを購入して、地区の皆さん方でその維持をして頂くとか。そこらもやっけて行かなくてはならないと思っております。

また、私どもの9地区のうち4地区でもう無医村になっています、中核病院の奥出雲病院もなかなかここも危機的状況で非常に苦慮しているところです。やはり病院関係とか買い物関係は、なんらかある程度行政の支援も前向きに出して、住民の支援をして参りたいというふうに思っております。

<増田>

徐々に進めていらっしゃるということですね。飯南町さんはさらに人口も5000人を切っている状況なので、いわゆる過疎化はより深刻に進んでいると思います。行政としての対応、どういう工夫を考えておられるのかそのあたりをお話して頂ければ。



<飯南町長>

飯南町の場合は、「ふるさと創生」の総合戦略の第2ステージへ入ろうということで、町全体では出生数40にしましょうとか、社会増5人にしますとか、そうした目標を定めています。それは町全体を現したものです。次は、集落単位、いわゆるコミュニティ、自治振興組織単位、自治区単位に、じゃあ足下のこと、その地域の問題点をもう一度さらに洗い出してそれに対してどう対応していくのか。あるいは、小さな

ビジネスということもありますけれども、どういう形でその地区を維持していくのか、持続的な地域作りをするのか、そこの所をすすめるようとしています。

基本になる地域包括ケアということで、国でいえば介護保険の関係で町を単位にした地域マネージャーという方を置いて、厚労省の事業です。で、さらに総務省の集落支援員という方を絡ませる、あるいは町の中の自治区長さんを絡ませるという形で。国の流れでは縦割になりますけれど、町でいえばそうした横の連携をしっかりとした組織、仕組み作りをする中で取り組んでいこうと、まさにそれを始めたところです。

<増田>

今日は斐伊川サミットということで、2市2町がお集まりになってですから、少し個別に話を聞いてきましたが、それを2市2町で乗り越えていこうということで、冒頭会長である出雲市長さんからお話があったように10年の節目で、次の10年に向けての活動の方向性を定めるという、こういうことなんですね。

出雲市がこの中で一番大きなところで、人が他から入ってくるのもやっぱりまず出雲から。拠点に、ハブのような役割になっていると思うのですが、会長としては次の10年を見定めて今後この斐伊川サミットとして、あるいは2市2町のつながりとしてどんな風に出雲地域全体を引っ張っていこうとされているのかをうかがいましょう。そのあと会場に、旧出雲市時代に助役として3年間勤務され、その後も度々こちらに来ておられるスローライフ学会の篠田伸夫さんもおいでなので、会場から少しお話を頂ければと思います。

<出雲市長>

我々4人はいつもいろいろな事業で顔を合わせながら、お互いの悩みも相談しながら話し進んでいます。けれど、やはりそれぞれの自治体ごとに違うんですね、色々課題も。私ども出雲市内においても人口が急増しているところ、急激に減っているところ、中山間地域、海岸、それぞれみんな事情が違う。

私どもはこの斐伊川サミットの皆さんとのおつきあいと同時に、県境を越えて鳥取県の2つの市と中海、宍道湖、大山圏域の市長会というのも作っています。今いろんな意味で自治体に限らず、連携というのは大きなキーワードになっている、さらにこれから大事になってくるだろうと。それぞれの思いを持ち寄りながらも全体としての大きな方向性というのもしっかりと共有してそこへ向かっていくという、その歩みを確実なものにしていかなければならない。いろんな事業を観光中心にやっておりますが、もうちょっとその範囲を広げてこのお互いの持っているいろんなものを一緒に活用できるような、そういう具体の取組を是非この先、今日をひとつの区切りとして新しくスタートをさせて頂けたらと思います。



<増田>

それでは篠田さん。

<篠田>

今日会場にお集まりの皆さん、私は昭和 55 年に自治省から助役で参りました、3 年間助役をやって、普通その市長さんの元で 3 年過ごすと、あとは縁が切れちゃう訳ですけども、何故かこの出雲市の場合はそのあと縁が切れなくて今も繋がっております。まさしく結びあうというか、分かちあうというか、その精神がここにあるようでありまして、逃げられないような状況になっております。私がこちらに来たとき、ちょうど斐伊川・神戸川の治水問題が非常に大きな課題としてございました。私も頓原のほうに伺いまして、神戸川に水を流すことになるそのことだったと思うのですが、当時の町長と親しくお話しをしたことがございます。

37 年ぶりに昨日、バスで神戸川それから斐伊川の流域を見ました。まさしくこの斐伊川・神戸川の流域地域というのは運命共同体だなあという思いを強くいたしました。稲という代表される農業と、鉄と、それからここは神話というもので結びあっているのが、この共同体じゃないのかなと思います。

昨日、雲南市吉田町のお菓子屋さんへ寄ったんですね、そこの若女将さんが我々を見て「ようこそ」といわれたんです。ようこそという言葉というのは、ものすごく素敵な日本語だなと感じました。これは今日初めて会う私たちと結びあいたいという気持ち、あるいは分かちあいたいという気持ちが、ようこそという言葉の中に象徴されているような気がして。これもなにか出雲人の心のやさしさを表しているんじゃないかなと思いました。

雲南市の斐伊川の堤防に桜が沢山あって、日本桜 100 選のひとつになっています。そして桜でまちおこしをやっている自治体が、「桜サミット」というのをやっています。それも実は竹下 登さんの「ふるさと創生」に、たぶん僕は淵源があるのだろーと思っております。「四全総」で定住人口を増やすことはなかなか困難である、地域間交流を図る交流人口を増やそうじゃないか、という話があったときに、雲南市の前身である木次町のほうから桜でまちおこしをやる人たちが集まって、サミットをやろうということで始まりました。それが昭和 63 年頃でしょうか。それから延々今日までやっています、私が平成 10 年の第 10 回目からコーディネーターを務めております。そういう点でも実は出雲市以外にも雲南市さんとも縁があるわけです。

今日ずっと話を聞いていて、本当にこの地域をよくしなくちゃいかんということを実際に考えて頂き、これをいいきっかけにしてさらに前進したいなという熱意を感じました。皆さん方のご健闘に心からの御礼を申し上げ、拍手したと思います。

<増田>

突然のご指名で、失礼いたしました。ありがとうございます。さて、たたら製鉄では、玉鋼を作るためになくてはならない炭を作って、それをずっと森林を再生する営みにつなげている。お聞きしたら大体ひとつのたたらで森が3000町歩必要だとのこと



です。毎年100町歩ずつ伐ってそこにまた植林して、30年経ってからまた伐ると、その循環をずっとしていくためにはやはり3000町歩の山をきちんと維持していかなくちやいけない。これはもう壮大な話で、しかしそれを延々とやってきたということがすごいわけです。

しかし、午前中奥出雲町の鉄師「絲原家」のほうにお邪魔して、ご当主のお話を聞いたんですけれども、今や苦しいのはその森林の材木の価格が、昭和55年をトップにしてそれからもう10分の1以下に下がっているということ、それをどう乗り越えて森を守っていくかが大変ということでした。

今日の話、これはもうスローライフのある種ずっと永遠のテーマかもしれませんが、神野先生のおっしゃった前近代的な良さ、循環型でありそして再生、持続可能性というのは、ずっと意識しながら我々は生きてきたはずなんですけれども、それが近代化・工業化ということでその良さをほとんどなくしつつある、もうなくなったこともいっぱいある。それをもう一度どういう風に再整備していくかということですね。我々は地域で現実に暮らしていかなくちはいけませんし、産業も新しい時代に合わせて行かなくちやいけない、常に知恵が求められている。そんな中でやはり身近なところにいろいろな文化や、そういうものの跡が一杯残っているところほど、多様な知恵を出しやすいのではないかと、そんなことを思いました。

それではスローライフの皆さん4名、それからあと最後に神野先生にも一言ずつになりますけれども、この出雲の國でこれからどういう知恵を出していけばいいのか、どういうことを期待しているのかをおっしゃって頂いて、首長さんからも一言ずつ決意表明して頂いて閉じたいと思います。

<齊藤>

皆さん自分たちがどういう風にどんな宝物を持っているかということについて、もうちょっと情報発信性を高めてもらいたいですね、その鍵はやっぱり

“食”だと思います、私、仁多米と最初に出会ったときに友達に送りまくりました。それから30年前にノドグロの美味しさを知って干物を、これも送りまくりました。そういう意味では味、食べ物ぐらい人に影響力を持つものではなくて、その情報発信性を高めていかに人に知らせるのか、というのが鍵だと思います。だんだん。

<早野>

出雲という言葉に、本当にほんわかとして、しかし、なにかとても心の一番そこから湧き上がってくるような生きる喜びみたいなもの、それを感じました。今日のお話の中にあつた、それを上からひっぱって来るのではなくて、右から、左からでもなくて、草の根から。改めてスローライフというのは、そういう精神と繋がっているのだなと思った次第です。

<坪井>

公民館単位でのまちづくりというのは、日本全国これから強めなければいけないことです。出雲地域において10年後20年後良い地域になっているとすると、きっと公民館単位とした小さな単位のまちづくりが成功しているときだろうと。全国に先がけてうまくやって頂ければいいなと思っています。

私、東日本大震災の取材にも携わりましたが、復興に成功している自治体は確実に公民館単位で自治が出来ていたところ、というのを見てきました。明らかですこれは。

<野口>

サミットという組織があつて、今回我々が係わつて、この4つの自治体だけじゃなくて全国各地にお友達関係が出来たわけです、サミットの応援団が出来た。この繋がりを大事に、次の何かを始めたらと思います。

私のご提案はやはり食いしん坊なので“食”、「たたらフードプロジェクト」というのをこのサミットでこれから始めたらどうかと思います。難しいんだか組織ということよりも、楽しいことから始めて繋がって行って、そして組織を作っていくというのがこれからは正解じゃないかと思っています。

<神野>

私のメモには、スローライフの考え方を紹介するところで「頑張らない宣言」が入っていたんですけど、申し訳ありません。今、増田さんがお話してくださいましたように「頑張らない宣言」は重要な精神です。で、それに絡めておっしゃってました持続可能性、これにちょっとコメントしておきます。

持続可能性というのは、自己再生力があるものを持続可能にするということです。自然は自己再生力があつて自分で再生していきます。それを持続可能にするということです。で、人間の社会も、自己再生力を持っているんですね、それを持続可能にするというのが持続可能性です。結びあう、分かちあうというのは、

自然と人間社会と2つを持続可能にしていく、自己再生力を持続可能にしていくことに結びつくのだということをまず申し上げておきたいと思います。

それから早野さんや坪井さんが、適切に私の考え方を他者へのやさしさということでまとめて頂きました。その通りでございまして、早野さんが何故あんなにも一生懸命私のつたない話を説明しようとしているのか？友達だからです。高校の同級生で結びあい、分かちあった仲間なので、一生懸命私の話を分かるようにしないとダメだと思ってやっけて頂いているということです。それでこの、他者へのやさしさという言葉に代表されることで、重要なのは・・・。

私はパリ協定をいかにクリアするかという、カーボンプライシングの検討の責任者をやらされています。今、日本はこれだけひどい状態になっているのに、昨年やった地球環境問題に関するアンケート調査を見ると、地球環境問題に関心のある人が40.6%です。これ多いか低いか色々議論はあるかと思いますが。ただ10年ぶりにやりましたので、10年前の調査では57.8%です。急速に落ちていくんです。

環境に、異常なことが沢山起きている。秋の台風が来て大雪を降らせる、というような異常な事態が起きているにもかかわらず、環境問題への関心は薄らいでいます。一番深刻なのは、18~20歳代までの若い人が、環境問題に関心がないのです。20%切っています。10%台です。それで10年歳を取るごとに10%ずつ上がっていく。環境問題に関心を持って未来を憂えているのは、60~70歳代以上の人。今後ますます暗くなります。この原因はいろいろありますが、他者へのやさしさというか他者への関心を失うと、自分さえ良ければという考え方に至ってしまう。自分さえ良ければという考え方から、命を育んでくれる環境問題にも関心を失うのです。

もうひとつ重要なものは民主主義、大衆民主主義に対する幻滅と失望が広がるんです。イギリスのコリン・ヘイという若手の政治学者が明らかにしている所によると、OECD諸国のもとで、戦後確立した大衆民主主義に最も絶望したのは日本なんです。2番目はイギリスです。いずれにしても他者への関心を失って、他者への信頼感などを徐々に失っていくと、民主主義も機能障害が起きてくる。つまり人間の結びつきと自然環境と、両方の持続可能性を失ってくる危険性がある



る。

そうしたことを考えるとこの出雲にはまだそうしたものが残っているんですね。それで持ちこたえてるんですね。地域への関心と、ただ単に個人的じゃなくて、人間は結びついて生きていかなきゃいけないんだということがまだ息づいている。

それでご存じの通り、私がいう必要ないと思うんですが、失業率が日本で一番低いのはここなんですね。圧倒的です。2%を切っています。こんなに失業率が低い地域があり得るのかというぐらいですね。高いところは3倍ですから。高いところは沖縄、それから青森、だいたい大都市部。大阪、兵庫、東京というような大都市部が失業は多いんですね。ここらあたりに注目し、もっと頑張ってもらえればと思います。それともうひとつ、それを育てていく仕組みの小規模多機能自治組織、これを発展させていただければと思います。

<増田>

では、一言ずつお言葉いただきまして閉じたいと思います。

<出雲市長>

今日のフォーラム全体を通じて、改めて出雲の良さというものを自ら感じたところです。市民の皆さんに自信を持っていただきたい。この出雲の良さはさつき早野先生のほんわかしたという表現をされましたが、出雲弁でいいますと、「おんぼら」としたという言葉になる。これはやさしいというか曖昧な言葉ではありますが、温かく包み込むようなそういう地域、その良さを活かしながら我々また4人で地域の方向性をしっかりと築いていきたいと思っています。

<雲南市長>

今日は全国へ発信するフォーラムとなっております。私は自分の名刺に「出雲の源」と小さく刻んでおりますが、10年経ったこの斐伊川サミットを新たな契機として、4人の首長さん方に提案したいのですが、「日本の源」と肩書きを名刺につけませんか。そのことを提案して私の発言といたします。

<奥出雲町長>

昨日から今日にかけてフォーラム大変ご苦労様でございます。昨日、特に奥出雲町のネーミングについても本当に素晴らしいものであるという、お褒めの言葉もいただいたところでございます。まあ本町の基幹産業は農業でございます。安全安心な食材が多く消費者にお送りさせていただいており、生産者にとって本当に大きな自信に現在なっておりますところでございます。私も首長として、様々な3セクを経営しております。販路拡大につきまして、更なる邁進をして参りますのでよろしく願いいたします。

<飯南町長>

これはお願い宣言ですけれども。飯南町もたたら遺跡が沢山あり、江戸時代

後半からの「高殿たたら」の地下構造としては全国規模のものもあります。そう
いうことで、今、たたらは日本遺産ですけれどやがては世界遺産へというお考え
もあるので、その時は是非、出雲市、そして飯南町も一緒に、世界遺産登録を目
指すということをお願いしたいと思っています。

もうひとつがまさに地域の資源をいかに活かすかということです。例えばし
め縄を、これを飯南町の地域資源を生かすひとつの象徴として、更に飯南町の地
域文化の振興に、頑張っ参りたいと思います。

<増田>

スローライフらしく時間がちょっとスローになってしまいまして、13分ほど
超過いたしましたけれど、以上でフォーラムの方は終了させていただきたいと
思います。雨模様の中会場にお運びいただきまして本当にありがとうございました。

